

# 清水卯三郎の政治観

— 『とうせいいさかいろん当世言逆論 政体篇』を素材として—

教育内容開発コース 白山映子

Shimizu Usaburō's Thought on Governments:  
From a viewpoint of "Tōsei Isakairon"

Eiko SHIRAYAMA

This paper challenges two generally accepted views. The first one is that "Sansuijin Keirin Mondo" written by Nakae Chōmin is considered as the first Japanese book which argues the government and international politics by means of a dialogue style. The second one is that although "Bampō Seiri" by Ga Noriyuki has been said to be the first translation of "De l'Esprit des Lois" written by Montesquieu, this book was actually a secondhand translation through the English version of the French original.

This paper will examine "Tōsei Isakairon," "Ritsurei Seigi" and "Ritsurei Seigi no Taii." Particular concerns in this research are the following: firstly, "Tōsei Isakairon," published by Shimizu Usaburō (1829-1910) in 1882, represented three sorts of governments: the republic, the constitutional monarchy and the monarchy; secondly, the style of this story appears much more dialogic than "Sansuijin Keirin Mondo." The former seems to be rather light and comical, intended to the ordinary people; thirdly, "Ritsurei Seigi" and "Ritsurei Seigi no Taii," translated by Suzuki Tadakazu and published by Shimizu Usaburō through his company, were the translations of the French original "De l'Esprit des Lois," unlike "Bampō Seiri."

Shimizu Usaburō was one of the modern Japanese pioneers of cultural exchange during the Meiji period between Japan and western countries, in particular, France and the USA. After his participation in the International Exhibition held in 1867 in Paris, he founded a new trading company in order to import numerous materials such as books of philosophy, science and jurisprudence as well as dental instruments. As a well-known 'Hiragana-ronsha,' he contributed an article about an orthographical system to "Mei roku Zasshi."

This research describing the dialogue of "Tōsei Isakairon," explicates the influences of Western thoughts, focusing on Usaburō's way of thinking about governments.

## 目次

- 1 はじめに
- 2 波乱万丈
- 3 『当世言逆論』
  - A 『当世言逆論』の序
  - B 東洋趣味・日本蟲眞 VS 洋学好み・西洋かぶれ
  - C 局外中立の中居先生登場
  - D 中居先生政体を論ず
    - 1 君主政治、貴族政治、民主政治の諸相
    - 2 政体は流行り物
    - 3 法律が変わると政体も変化する
    - 4 中居先生ははぐらかした
- 4 『法』の精神』との関連性
- 5 『当世言逆論』の文体

- A 問答形式と対外認識
- B ひらがな論者
- 6 おわりに

## 1 はじめに

幕末から明治にかけて西洋から日本に様々の事物が移入された。文学や芸術などの文化、ヨーロッパの啓蒙思想、医学や教育制度、鉄道、造船技術など枚挙にいとまがない。こうした移入に携わった人物の一人として清水卯三郎（1829-1910）を挙げることができよう。

慶応3（1867）年、パリでは万国博覧会が開催された。卯三郎はパリ万国博覧会参加の為に商人として渡

仏した最初の日本人である。幕府の勧めに応じパリ万博への出品に名乗りをあげ、幕府から利率5分で2万両の大金を借りて出品物買集に奔走、多くの出品物をパリに運んだ。パリ万博は1867年4月から半年にわたって開催された。独創性豊かといってよいのか難しいが、卯三郎はパリ万博に若い日本の女性を3人連れて行き、会場の日本館で水茶屋を開き、お茶やお菓子の接待をする企画を実践した。キセルでタバコを吸う女性の姿はヨーロッパの人びとを驚かせ、新聞などで大きく報道された。いわば「人間の展示」の草分けということになる。初めて万博に参加したわが国は、養蚕、漆器、工芸品、和紙についてグランプリをとり、卯三郎はナポレオン3世から‘OUSABOURO’の名前入りの銀メダルを授与された。

卯三郎は博覧会終了後、欧米諸国を回って1868年5月に江戸に帰ってきたが、持ち帰ったフランス土産には活版機械、陶器着色法、鉱物標本、西洋花火などが挙げられる。

西洋の香りを体中に浴びて帰国した卯三郎であった。海外体験は日本を客観的に相対化する目を育む一方で、また愛国心をも刺激する。文政12(1829)年生まれの卯三郎は当時の洋学思考の影響下、英語・フランス語・ロシア語などにも精通していたが、熱烈なひらがな論者でもあり、庶民の啓蒙を目的として様々な活動を行った。横浜で商売のための英会話辞書を作成してもいる。また「明六社」の社員として『明六雑誌』に論考も寄稿した。帰国後、浅草に瑞穂屋商店を開いた卯三郎は、印刷及び出版業と輸入業を営んだ。そして西洋の学術書や啓蒙書を輸入・販売したが、その中にはモンテスキューの『法の精神』の原著も含まれている。

本稿では、まず幕末までの卯三郎の前半生を概説したい。次に当時移入されたヨーロッパの政治思想が、明治初期の人びとにどのように受けとめられていたのか、また卯三郎がどのような政治思想を懐いていたのかを、中江兆民著『三酔人経綸問答』以前に出版された経世論の一例である卯三郎の著書『当世言逆論 政体篇』(以下『当世言逆論』とする)を素材として考察したい。さらに卯三郎の政治観に影響を与えたであろう『法の精神』及びその翻訳書についても言及したい。

## 2 波乱万丈

卯三郎は文政12(1829)年3月4日、武蔵国箕沢

村(現在の埼玉県羽生市)で生まれた。父親は酒造業と薬種商を営む素封家、母は儒者根岸友山<sup>1</sup>の妹であった。10歳になり私塾を営む友山の家で養育され、芳川波山から漢学を学び、宇田川榕庵訳の化学書『舎密開宗』を精読したという。

時は幕末、黒船の来航で国内は騒然としていた。嘉永7(1854)年10月、ロシアの使節プチャーチンが下田にやってきた。卯三郎は幕府大目付の筒井政憲の供人の名目で下田に随行。11月に大津波が下田を襲い露艦ディアナ号が沈没した。卯三郎はプチャーチンの部下と接近しロシア語を学ぶ。その後江戸の箕作阮甫に私淑し、オランダ語学習に励み、専門書の読解に支障のない実力をつけていった<sup>2</sup>。

安政4(1857)年、海軍伝習生を志願して長崎に向かったが、希望叶わず翌年江戸に帰る。安政6年に横浜の「田辺屋」という店で大豆の売買を行った。しかしここで起きた事件が卯三郎の転機となる。友人の医師と散歩中、キニーネを売る店でトラブルに遭った。卯三郎は8ヶ月間町預けとなるが、その間通詞の立石得十郎から英語を学ぶことにした。立石の養子斧次郎と親交を結び、松木弘安(後の寺島宗則)とも親しくなった。麻布の善福寺では、斧次郎が米国総領事ハリスの書記官ポートマンに日本語を、ポートマンが卯三郎に英語を、卯三郎が斧次郎に漢語を教えるという語学学習を行った。ここでの英語習得が薩英戦争時の和平斡旋に役立つことになる。

文久3(1863)年、卯三郎は意外な事件に巻き込まれた。前年8月に起きた生麦事件の後、イギリス艦隊が鹿兒島を砲撃、卯三郎が薩英和平の斡旋に働くことになる。生麦事件の賠償金支払い交渉が決裂し、イギリス艦隊は横浜を出港し鹿兒島に向かった。イギリス側の通訳はアレクサンダー・フォン・シーボルト、日本側の通訳として卯三郎に白羽の矢が立った。卯三郎の語学の素養と町人の身分が役に立った。卯三郎は軍艦ユーリアラスに乗船し薩英戦争を見物することになる。この様子は『福翁自伝』の中でスリルたっぷりに描かれている。自伝という性格上、多少の誇張と記憶違いはあると思われるが、福沢は卯三郎を行動的人物であると評価している。斡旋は成功しなかったが、彼は幕府にも薩摩藩にも一目おかれる存在となる。この軍艦で捕虜となっていた松木弘安と五代才助(後の五代友厚)に遭遇し、縁が続くことになった。

前述のように卯三郎はパリ万博に参加した。この万博は幕府と薩摩藩が別々に参加したことでよく知られている。澤護の「清水卯三郎——1868年パリ万国

博をめぐって——<sup>3</sup>』によると、パリ滞在中の卯三郎の行動は詳細が明らかではないが、レオン・ロニー(Léon de Rosny 1837- 1914)との交流が推測されるという。ロニーは来日することはなかったがフランスの東洋学者で、1868年3月24日、パリで日本字新聞「よのうはさ」を発行した。この新聞は熟達した漢字と平仮名交じりの変体書きのものであることから、新聞発行の協力者に卯三郎の存在が推定されている<sup>4</sup>。博覧会終了後、卯三郎は欧米諸国を經由して帰国した。

卯三郎は『己がよのき 上』という自伝を残した。これは慶応3年1月11日、パリへ向けて横浜港を出港する日で終わっている。続編でフランスの記事を書く予告したが、その存在は確認されていない。

箕作塾での交友関係、松木弘安、五代才助との親交、パリ万博には徳川昭武に随行して田辺太一、洪澤栄一、栗本鋤雲、箕作麟祥、田中芳男、福地源一郎などが出向いており、彼等との接触も当然あった。このような知的・人的ネットワークの中で卯三郎は活動を行っていく。

### 3 『当世言逆論』<sup>5</sup>

『当世言逆論』は明治14(1881)年11月26日に版權免許を得、同15年1月に出版された。著述兼出版人は清水卯三郎である。表紙、作者序、本分は78ページ、そこに正誤表が1ページ、奥付に発兌書肆、売捌書肆が記載され、定価は金三十五銭とある。これは談義本のように講談師の口調を真似て、おかしさと教訓を取り混ぜた諷刺物でもある。また3人の掛け合い形式による問答体の政治論である。問答体の経世論としては中江兆民の『三酔人経綸問答』があまりにも有名である。この兆民の書は明治20(1887)年5月に東京集成社から出版された。しかしそれに遡ること5年以上前に、『当世言逆論』が卯三郎によって書かれていたという事実は知られていない。筆者は、本書が問答形式で和漢の故事や史実、庶民の日常を例に挙げ、政治を分かりやすく説明する啓蒙書のひとつだと認識している。

#### A 『当世言逆論』の序

先ず「当世」という言葉である。これを「とうせい」と読むか「いまよう」と読むかは難しい。静観房好阿による『当世下手談義』(宝暦2年)は「いまようへただんぎ」と「いまよう」と読ませている。一方で明和6年に日穎齋が出版した『当世穴さがし』は「と

うせい」とルビが振られている。江戸期には「いまよう」と表現することも一般的であったが、明治期になると「とうせい」を使う書籍が見られる。坪内逍遙の『当世書生気質』、饗庭篁邨の『当世商人気質』などは明治18年から22年頃までの作品だが、何れも「とうせい」と読ませている。『当世言逆論』では「言逆論」には「いさかいろん」とルビが振られてあるが、「当世」にはルビが振られていない。明治期の作品であることを鑑み、また逍遙や篁邨の作品に倣って、ここでは「とうせい」と読むことにしたい。「当世」とは「いまよきの流行」を意味している。卯三郎の「当世」には、その当時は自由民権や政治の議論が流行っており、またそれぞれの政治体制それ自体が流行り廃りで変化するものだという二重の意味の掛詞になっていると解釈できる。「言逆」は喧嘩・議論・反論の意味で使用されている。

それでは卯三郎はどのような言逆論を書こうと思ったのか。卯三郎は序文に次のように記した。

#### 言逆論序

論之無所歸着者俗謂之言逆論  
 童幼無識之徒所論多是也  
 而碩学鴻儒所論世謂之正論  
 然而亦終見其無所歸着  
 則唯可謂之言逆論耳  
 日何以言之  
 日性之善惡未嘗見其所歸着  
 武王夷齋之曲直未嘗見其所歸着  
 耶蘇宗奉神一希臘教奉神多  
 而未嘗見其所歸着  
 税之自由與保護亦未見其所歸着  
 其他先哲所論為是者後輩論之為非  
 先代所論為曲者後世論之為直者  
 往々觀之史籍皆以入者為是以出者為非焉  
 然則世為正論者亦唯隔世言逆論也  
 己作言逆論  
 二千五百四十二年第一月  
 清水静宇識

(大意：筆者による) いさかいろんのじょ  
 論の歸着するところの無いものは俗にこれを言逆論という。子供のような知識の無い者の所論は多くはこのようなものである。(だが) 学者諸先生の論はこの世ではこれを正論と言う。しかしまた最後の歸着するところ無しと見るならば、ただこれを言逆論と言う。人

間の性の善悪は帰着するところを見たことが無い。武王夷斎の曲直は帰着するところを見たことが無い。耶蘇教が奉る神は1人、希臘教が奉る神は多いが、しかしまだ嘗てその帰着するところを見たことが無い。税の自由と保護はいまだその帰着するところを見たことが無い。先代が正しいと論ずるものでも、後輩は正しくないとする者は数多い。この世では正論とみえるものは既に世代を経たもので、実はこれは言逆論である。私は言逆論を作ることにする。

卯三郎がここで主張するのは、何事も善悪や正義論では計れないもので、時代や世相などの変化によってそれらの価値判断は変化して行く相対的なものだと断っている。

このように対句を駆使し、漢文で重々しく自分の意向を示した後、寄席の落語のように政体論が繰り広げられる。次節では『当世言逆論』の内容を順次説明したい。要約をするというのは本書の絶妙な掛け合いの面白さを削ぐもので、本来ならば総てを書き下して紹介したいのだが、紙数の都合上、原著のままの引用部分と要約部分が生じてしまった。面白さが半減してしまったことは否めない。この点を了承していただきたい。

## B 東洋趣味・日本最頂 VS 洋学好み・西洋かぶれ

登場人物は3人である。荒場社八(あらばこそはち)は漢学と日本趣味、空野琴太(そらのことた)は西洋好み、しばらくしてそこに仲裁者兼先生役の中居が登場する。社八と琴太はどちらも二十歳を少し過ぎた竹馬の友である。毎日お互いの家を往来しては言逆論に花が咲く。議論は合わないが気が合う二人で、今日は琴太が社八の家に入りこみ、いつものように議論を始めた。

まずは和風作りの社八の家に入る。洋装の琴太は靴を脱ぎ、差し出された座布団に座ろうとする。その際に琴太は「野蛮向き」と思ったがそれを言い換え、「不化」な家には靴を脱いでもまだ座らなければならない、椅子のひとつも置いてはどうかと訴える。「不化」は「ばるばる」とルビが付されており、'barbarous'つまり「野蛮な」の意味である。これに対して社八は、自分も琴太の家に行くと椅子は本当に辛い、帰りには足が浮腫んで困ると言い返す。イソップの「狐と鶴」の挿話を引き合いにし、「郷に入っては郷に従え」と話は進み、政体論へと展開する。

琴太は孔孟の道に詳しい社八の言動を指摘して、社

八の好きな孔孟は圧政家であり、君主専制を良いと思いついでいると言う。だから他の良い説があっても耳に入らないのだろう、自分の望む「レポブリク」[republicの意:筆者による注記]は民主政治で徳政だと自慢する。ここで君主専制と民主政治の対比がなされていく。

社八は家造りに喩えて、君主は大工の棟梁であり、棟梁が切り盛りをして住む人が快く住めるように努めると話す。それでは棟梁は誰にも頼まれずにその家を建てるのかと琴太の質問。住む主に頼まれて建てる社八は答える。琴太はそれこそ民主政治の良い喩えになると半可通の英語を使用して続ける。

以下文章中の( )内は原文に付されていたルビである。ほとんど総ての漢字に和語のルビが付されているが、その中の一部を表記するにとどめた。また旧字体は新字体に改め、[ ]内には引用者の注記を付した。

琴太「イヤ夫(それ)は却(かえって)民主政治の喩に当る、何(なぜ)なれば其(その)頼む人を、国民と見、又其頼まれる人を、伯列爾天徳(プレジデント)、即大統領(だいたいと)りよ)と見、其外の諸官員は、脇棟梁(わきと)りよ)、下方(したかた)に擬(あた)る、さすれば、「モナルチイ[モナキーのこと]」とサ云ては解るまいが其、君主専政の喩(たとえ)には出来ぬ、君主専制の喩は「げんぶらめん[ギャンブラーメン]」是も解るまいが仍(やはり)、博奕の首魁(かしら)に当る、其博奕の首魁になる奴は、何(どこ)か勝れた処(ところ)があつて博奕(ばくち)しても、裸になる迄は打たず、喧嘩(けんか)が起ても、賢(かしこく)働き、人の難儀(なんぎ)は裸になつても救い、己の恥は腕(うで)をこいて雪(すすぎ)、などする処置(しよじ)ぶりが好くて、自(おのずと)人びとが敬(うや)もう)て、兄(あに)と言ひ、大将(たいしょう)と称(と)なえ)、又跡(あと)から来る奴は、もう一杯(いっぱい)尊ん(たつとん)で、親方(おやう)といい、親分(おやぶん)というようになる、扱親分(あつかいぶん)親方(おやぶん)といわれて見ては、子分子方(こかた)と博奕(ばくち)「げんぶら[ギャンブル]」をして、金銀(きんぎん)を争(ま)うと上下交(じやうげう)「こもごも」利(り)を取て征(せい)す[上下交征(じやうげう)孟子の言葉]、という者に陥(おと)て、賤(せん)められるから」

社八「ドッコイ、ソレは孟子の言(ことば)だ老

兄が遣てはならぬ筈だ」

琴太「マア、チョイト、仮（か）りたのだ<sup>6</sup>」

こうして議論が白熱してくる頃、喉が渴いた琴太がお茶の催促をしてきた。部屋の障子を開けて丁稚の子供にお茶を出すように社八は促す。棒を片手に待機していた子供に、社八は棒で悪戯をしてはいけないと論ず。子供は二人が喧嘩をしていたと勘違いをしており、仲直りをしたのかと問い返した。子供は主人である社八の助太刀のために障子の外で控えていたのだ。そしてそのわきには中居さんが座って待っていた。先刻からの二人の議論を聞いていたのだという。

### C 局外中立の中居先生登場

社八は、自分たちは民主制と君主制の善し悪しを決めたいので、丁度良いところにおいでだと言って、中居先生にどちらの説が妥当かの裁断を依頼する。

中居先生が加わり3人の問答が始まった。どちらが良い説か決められない場合は、相撲をとってその勝負で決めようか、という社八の言葉を聞いて、中居は「近頃開けたお説だ」と述べる。西南戦争や普仏戦争の例を挙げ、議論の果てには戦いとなり大勢の命が失われることになる。それゆえ擦りむくか鼻血が出るくらいの相撲の勝負のほうが「開けたお説」だというわけである。そもそも君主制や民主制の善し悪しは議論ばかりでは決められず、行ってみなければ事の結果はわからないから判断を下すことは出来ない、というのが中居の意見である。

琴太は、民主政治のよさは、喩えて言えば火は熱く水は冷たいということと同様だと始めた。これに対し社八は、夏の汲み置きの水は冬の汲み置きの水よりも熱いという。しかし琴太は、それは熱いとは言わず、ぬるいと言うのだと反論する。そこで今度は中居が、ぬるいというのはいろいろで、沸騰したお湯も少し冷めればお茶を入れるときにはぬるいというが、そのぬるいというお湯も、生身に浴びれば熱いということになる。下戸がお茶の効能を唱えて酒の弊害を数え、上戸が酒の徳を挙げお茶の非を述べた時に議論が生じる。お互い身びいきの説を主張するときに言逆いが生じるのだと自分の見解を述べる。

しかし社八は、木綿より更紗のほうが良いし、野菜より肉類が良い、金は銀よりも良いし、銅は鉄よりも良いというように比較が出来るのではないかと問いたです。それに対して中居は、経験済みのことは比較できるが、しかしそれでも、金銀は銅や鉄の用をなさず、

木綿よりも高価な絹はべらべらして着にくいという人もいる、肉類よりも安い野菜のほうがさっぱりしていて好きだという人もおり、蓼食う虫という社会であると述べる。

民主政治を経験した国ならば比較できるのではないかという琴太の意見に、中居は次のような所論を展開する。

中居「左様(さよう)サ了然(はっきり)した事跡(こと)があつて比例(ひり)さえ立てば、善悪(よしあし)は極(きめ)られます、併ながら今直に、比例は立てられない、何(なぜ)というに、昔希臘、羅馬の頃に、民主政治があつて、行われたれども、終(ついに)倒れて君主政治となり、欧州一般其政治を、持伝えた事は久い、夫(これ)からまた彼(か)の民主政治が起り返つて、漸(ようやく)彼の国、此(こ)の邦に始り、既にアメリカの民主政治は、僅百年斗(ばかり)でござる、なれども弊もあり、害もあり、戦争も、時には起るのを見ると、只今急度(きつと)好とは、極(きめ)られない、只悪逆無道の悪(わるい)君主政から見れば、好(よし)サ又民主政の、弊害戦争のあるのは、悪と言わねばならず、又多少の数で言(いえ)ば、まだ君主政の邦が多し、仮令(たとえ)然(そう)いうた連(とて)もまだ見たり、聞いたり、した斗(ばかり)で、我身の上(う)に経験(ためし)たのでないから、急度(きつと)とは定められぬ……<sup>7</sup>」

前述のように中居は自ら経験したことならば推量できるが、そうでないものは分からない、ましてや国中の人々の関わる民主政治に関しては経験したことがないので、うっかり良いとは言えないと答えている。

それでも納得しない琴太は、自分と社八の説のどちらかに判定を下して欲しいとせがむ。中居は、自分は局外中立の立場であるから判定は二人に任せるほかに方法はないとして、どちらの肩も持とうとしない。二人の議論は夫婦喧嘩のようなものだからだと受け流す。しかしこれでは面白くないという琴太の言葉に触発され、中居は所論を展開することになる。それほど言うならといった様子で中居は語りだした。

## D 中居先生政体を論ず

### 1 君主政治, 貴族政治, 民主政治の諸相

先ず中居は、「人の出来始め」、すなわち人間の誕生から始める。およそ人の出来始めはやはり野の中に虫が生まれ、水の中に魚が産(でき)るようなもので、人もその人となる元素がたくさん集まる場所で、天然の妙合(みょうごう)とか舍密(せいみ)の集合という理によって生まれ、更に生まれ継いで今日のように蕃植(おお)くなったものと語る。

中居は次のように続ける。つまり、このように増えた人たちがひとつの群になるのだが、初めのころは知恵も勢力(いきおい)もたいてい同じで、夫婦の決まりもなく、親類の情けもなく、また貴賤の差別もなく、豪慢謙遜という情も起きずに碌々と日を送っていたものだ。しかし同生一様ならずで、強弱、賢愚、惰勉、貧富の人びとに分かれてしまう。そこに羨み、嫉み、誇り、褒める、へつらう、いばる、偽るなど感情が交じり合ってさらに多様な人びとが生じることになる。そしてそのような人びとが勝手なことを言い始め喧嘩や闘争が始まる。こうなるとそれぞれの地域で人が集まって相談する必要が生じる。この相談が即ち民選議事の始まりである。その中から有能な人物が信頼を受け伯列爾天徳(プレジデント)の位地を占め、ついには威力(いきおい)を得て言うことが通るようになる。更に何事も専制してついに霸王となり君主政治に移るのだ。

中居は、その民選議事は豊芦原瑞徳の国の古(いにしえ)にもあったと日本の例を引く。横山由清<sup>8</sup>君の台命(だいめい)によって選んだ公議論という書も見ることがあるが、その大古(おおむかし)イザナギノミコト、イザナミノミコト、共に議つてヒカミオオイルメノミコトを生んだ。夫婦の協議を推し広めれば、これがやはり衆人の公議に因る根元(こんげん)であり、推古天皇紀に皇太子トヨキキニノミコは憲法十七条を作り、和(やわらぎ)を以て貴しとし、必ず衆(おおくのひと)とよろしく論ずべし、などと広く衆議をとっていたと語る。続けて中国の政体を引用し、禹王(うおう)の前までは「オルガルキイ [oligarchy = 寡頭政治]」または「アルシトクラシー [aristocracy = 貴族政治]」という政体のようにみえると述べる。

さらに中居は次のように続けた。日本も中国も、昔と現在の政体は変化しているが、これらを西洋では君主政、民主政、貴族政の三政体に分けて論じていると指摘した。中居は三政体の変革(うつりかわり)を希臘の例を挙げて説明していく。希臘のあちらこちら

に国王がいたが、アガメムノンが出て初めて希臘全国を統一した。しかしドリアンに滅ぼされ王政がなくなり「コンモンウェールヂ [commonwealth]」となった。希臘が倒れて分散した人々は門閥(いえがら)を形成し、寄り合って政治を行った。これが「アルシトクラシー」で貴族政と訳す。これらの人々がそのうちに貧賤(まずしい)人等を賺瞞(こけ)にするようになった。その貧しい人たちが噪(さわ)ぎだすと、これでは大変と門閥(いえがら)の人等が驚きだす。知恵のまわる人物がこの機に乗って貴賤貧富の差別なく呼び集めて執り行った政治が「デモクラシイ」というのである。この後「オリガルキイ」という政治が起こったが、この政体はやはり「アリストクラシー」と同じことで、よく治めるときは「アリストクラシー」といい、善政府という希臘語である。また悪い政治の時には「オリガルキイ」という。上(かみ)に立つ少しの貴族官員が自分勝手に政治をするので、小勢(こぜい)の政府という意味である。

結論として中居は、政体は君主政、貴族政、民主政が移り行き留まる場所は分らないと述べ、墮落と奢りと内輪もめがある限り政体が一定にとどまることはない、そして社会の状況に応じて君主政にもなり、貴族政にもなり、総体としての国民の知識と権力が増せば民主政にもなると判断する。

### 2 政体は流行り物

そこでまた琴太は、それではどの政体が良いのか、比喩が立てられれば善し悪しが決められるのではないかと最初にした質問に戻り中居に尋ねる。

中居「サアその比喩は魯熟(ろじく [logic]) という学で西先生 [西周のこと] の著わした、致知啓蒙、という書に、ありますが、此の学を、撮(つまん)で申せば「人は死ぬものだ、神武帝は人だ、其故(それゆえ)に神武帝は死(しん)だ」というが、即(すなわち)此の学の大意で、凡(およそ)此例を取り彼(か)の事に比べて、定(きめ)るのでござるが、人の死(しぬ)という事が、定(きめ)って居(い)る故に、神武帝も人であるから死んだと、比喩(ならべくらべ)で、定(きめ)られます、けれども貴公(あなた)の好(いい)、という、民主政が、世上(よのなか)に善(よい)と定(きま)ってあれば、外(ほか)の政体は悪いと、いわれますが、前に申す通り、尚(ま

だ) 正 (たしか) に決 (きま) った, 例 (ためし) のないものを, 稔 (しか) と善 (よい) とは, 申されませぬではござらぬか, 殊 (こと) に形体 (かたち) のない, 人の心に至っては, 縦にも横にも, 動きやすいものゆえ, 仮令 (たとえ) 教育を受 (うけ) た, 人でも, 時勢 (ときよ) につれて, 善 (ぜん) にも移り, 悪にも変ります, 其移り変る人の, 多く向く処が, 其時代 (そのとき) の善 (よい) とか, 悪いとかに, なるので, 所謂時勢 (じせい) というので, 商貨 (あきないもの) でいえば相場と同じことで誠によんどころない事とござる, コレヲ熟 (つらつら) 考えてみると, 政体というものも, 仍世の中の流れ (はやり) ものと, 思われます]

琴太「イヤ政治がそう流行 (はやり) たり, 衰廃 (すたり) たりして, 堪りますものか」

中居「イイエサ, ソレハ人民の内に, 自 (おのづ) と流行って, 来るのでござるて, マア暫 (しばらく) 御待ちなさい, 私が一つ諭る事があります, 凡 (およそ) 人の眼鼻耳口には, 皆流行 (はやり) のあるものでござります」

琴太「ヘイこれは面白 (おもしろい) 御説だ, 謹 (つつしん) で承りましょう<sup>9)</sup>」

ここに中居の政治観が現れているだろう。つまりロジックで結論が出せるものとそうでないものがあるということである。そのときの時勢や社会状況によって流行り廃りがある。人の心も同様で一定に留まることはない。政治もまた流行を追う人の趣味と同様で, 商売に例えるならば相場と同じだと述べている。

この後に, 中居は目鼻耳口のそれぞれの流行を語り始める。目は色の流行のこと, 口は日本料理や西洋料理, 鼻は香袋と西洋香水, 耳は長唄, 常磐津, 清元, 新内などの邦楽から月琴, ピアノやラッパというようにそれぞれの流行を挙げていく。この部分は明治初期の西洋文化の移入の様子をよく伝えている。

目鼻耳口にこのように流行があるのを見ると, これらは脳神経 (こころ) に伝わるのでその政体も自然に流行が起こるだろう。しかし政府が流行を規則や法律で抑えこんでしまうので, そう妄りには変わらない。しかし, 人の心の移り変わりとともにいつの間にか世間の政体は変化しているのであると中居は語っている。

### 3 法律が変わると政体も変化する

中居は法律が変わると政体も自然に変化してくると言う。琴太は法律が変わっても君主政体で維持できる国は, 日本や中国以外にもヨーロッパにたくさんあるのではないかと反論する。中居がこのように答える。

中居「ナル程, 御尤 (ごもつとも) のようだが, 名は君主でも, 其实は大いに變って居りませぬ, 昔君主政であった, 日本も, 武家天下 (ぶげてんか) と, なってからは, 君主政の変体とござる, 又徳川政府も, 数代の後には, 將軍を措 (おい) て閣老 (ごろうじゅう) が政事を執り, 其後は閣老が奉行等 (たち) の意見を執り, 又其後は組頭 (くみがしら) 杯の評議を待つように, 追々と下へ移りました, 又今では, 王政維新となって, から, 府会県会, 杯と云って, 猶一層下に移りました, けれども尚 (まだ) 君主政の形とござるて, 譬 (たとえ) ば今一の家を政体に喩て申せば, 其内に居て, 洋服に打扮 (みつくろ) いをすると, 椅子でなければならぬ, 椅子に腰をかけると, 卓子 (ていぶる) でなければならず, サソウなると, 畳も板の間に, 替たくなり, 冬は暖炉 (すとうぶ) を置く気になり, 此等を法律に喩ると, 政体とした, 家屋 (いえ) も, 寧 (いっそ) 洋風 (せいようふう) でなければ, 不自由とござります, 此の矩合 (くあい) で, 法律が, 替れば, 政体も又変る訳とござる, 昔英国 (いぎりす) は君主政とござりましたが, 他国の色々の法律に擬 (あてはめ) て替たが, 原因となって, 遂に君民同治に移り, 又漸變しても, 国王を捨てることの, 出来ない情有 (あ) ると見えて, 今では君民同治の形でも, 勢は民主政とござります<sup>10)</sup>」

家を政体に例えて, 家の様式が変わると自然に住み方が変化していくように, 法律が変わると国家も形も変化する。イギリスは君主制民主主義の形をとってはいるものの, 実態は民主政治だと指摘している。

### 4 中居先生ははぐらかした

それならばと再び琴太は, 三政体の中で日本にはどのような政体が適当なのかを質問する。

中居「イヤ三政体というは、是れまで有った、政体を三綱（みつ）に、分けたので、是れから後も、此の三政体に限るといふのではござりませぬ、又別種の政体が起こるも知れませぬ、夫故（それゆえ）孰（どれ）が宜（よろしゅう）ござりましようか解りませぬ、併今日は立憲政体になりかかって且（そのうえ）民権家が増進（ふえ）、国会家が多くなりましたのを見ると、其杯がよいのでござりましよう」

琴太「ヘイソレデハ君主、民主、の善悪（よしあし）、も極（き）められず、三政体の外にも、尚（まだ）有るかも知れぬといひ、又立憲政体が宜かろう杯と、御仰（おしやつ）て見ると、何という御説でござりますな」

中居「サヨウサ是で決定（きまり）と申す説はござりませぬと、言うのは、前に申す通り、駁々（しんしん）と開け往く人の心なれば其開け尽るまでは、何事も是で極まったとは、いわれませぬ、只其時の多くの人の、善（よい）というのを、よいとし、悪いというのを、わるいとして、置より外には、致方がござりませぬ、前に両君（あなたがた）の自由に任せると、申た事は、此でござります、この自由から各自（おのおの）説を考え立てると、世の人の心に適うと、適わぬとで、善いとか、悪いとか、に成ります、其通り政体も、世の人の心に、適わねば、永く続く訳には、いきませぬ、譬て申せば、政府は、人民の御守のようなもので人民の心に適いさえすれば、泰平無事（むじ）でござるから、必しも三政体には限りませぬ<sup>11)</sup>」

結局、中居先生の考えは、卯三郎が『当世言逆論』の序文で述べたように、未だかつて帰着したことがない例として政体を論じ、政体に善し悪しはつけられず、自分の考えに任せるしかないという。それゆえ社八と琴太の「議論＝言逆い」にどちらが正しい論かと判断を下すことはできない。政府は人民のお守りのようなもので、人民の希望に適いさえすれば新たな政体も納得されるだろうと述べ、三政体からまた別の政治体制が出現してくる可能性も示唆している。

こうして議論が終わろうとする頃、社八の母親がお墓参りから帰ってきた。母親の数珠を見て琴太は耶蘇宗への転向を勧めるが、この言葉に社八は反発する。

次に会う際の議論は仏教とキリスト教の宗教論議になりそうだ。また明日会うことを約束して言逆論は終了となる。終わりに近いところで、中居先生は「天然の法 [ natural law ]」について言及した。卯三郎は言逆論の法律篇を予告しているが、残念なことにそれは出版されなかった。

#### 4 『法の精神』との関連性

前述のように明治元年、卯三郎はパリを後にして欧米を回って帰国した。そして浅草で瑞穂屋商店の経営を始めた。輸入業と出版業が主たるものだが、特に外国の啓蒙書を取り寄せ積極的に販売を行っている。

卯三郎は『当世言逆論』を著すに当たり、モンテスキューの『法の精神』から多大なインスピレーションを受けたのではないかと筆者は推測した。なぜならば、卯三郎はフランスから『法の精神』を取り寄せ、それを鈴木唯一（すずきただかず）が翻訳し『律例精義』と題して出版しているからである。

明治8（1875）年4月25日の『郵便報知新聞』の告知欄に、瑞穂屋の屋号を持つ卯三郎は「本月輸入仏国書籍」として動物学、植物学、地質学、法律、薬剤の辞書など30種類ほどの書籍を挙げている。その中には「スピリット・ド・ロワー」と表記されたものが認められる。英語とフランス語の混合ではあるが、これはまさしくモンテスキューの“De L'Esprit des Lois”を示している。また同『郵便報知新聞』明治8年5月15日号の告知欄には、「鈴木唯一訳 律例精義 近刻」と翻訳書の出版予告が下記のように掲載されている。

これは仏国「モンテスキウ」氏撰する所の「エスプリ、デ、ロワア」と云う書にて君主専制一君政治共和政治の三体を挙げ之を維持する所以の大綱自異なる論を始めとし凡百の律例皆其の政体に由て斟酌せずんば有る可からざる者と其国土の地質寒暖大小位置其人民の工作農耕牧畜狩猟若くは其品行の高尚若くは其生計の貧富及び宗門等に由て取捨損益ある者千差万別なりと雖も皆自其理あることを論じ更に之を万国の古今に徴し以て将来の律例と論ぜば欧亜諸州に超絶して善政美治の必茲に興らんとことを知るべし

東京本町三丁目 瑞穂屋卯三郎謹白

さらに同年7月22日、7月29日、8月7日、8月28日の『郵便報知新聞』にも前回の広告より短い文面だ

が、「仏国モンテスキウ著 日本鈴木唯一訳 一律例精義 全部三十一巻 一巻から三巻迄一冊価二十五銭 右は六百六十八号新聞に御披露申上候エスプリ、デ、ロワアと云う原書にて君主専制一君政治共和政治の三体を挙げ（略）之を万国の古今に徴し以て編輯し一部となしたる書なり」という内容の広告記事が載っている。

このように頻繁に広告がなされていることから見ると、かなり力を入れて翻訳・編集・出版作業が行われていたのではないだろうか。この『律例精義』は29丁の和綴じで碧山書屋蔵版、明治8年7月に出版された。本書には「モンテスキウ小伝」が付されている。“De L’Esprit des Lois”の原著は31篇で構成されているが、『律例精義』は第3篇までを訳出したもので、同年12月に同じ翻訳者により出版された『律例精義大意』の自序にはその理由が示されている。それによると、3篇は翻訳を終えたが、すべてを訳出するには数ヶ月を要するため、先ずダランベールによる“De L’Esprit des Lois”所収の賛辞と要約を先に翻訳し上梓することになったと言うことである。この出版広告も見てみよう。

仏国ダランベルト著 日本鈴木唯一訳 律例精義大意 全1冊定価二十五銭

此ノ書ハモンテスキウ氏律例精義ノ大巻ニシテ一  
目盡スコト能ハサルヲ患ヒダランベルト氏其大意  
ヲ摘要シテ著ワス者ナリ今此ニ翻訳シテ一巻トナ  
ス学者此ノ書ヲ一見スルナキハ復彼ノ大巻ノ全本  
ヲ要スルニ足ラザルナリ

東京本町瑞穂屋卯三郎謹白

この広告は『読売報知新聞』明治8年12月24日、26日、翌年1月10日付けに掲載された。立て続けに掲載されており、ずいぶん慌てての広告のようにも思えるが出版競争だったのかもしれない。

“De L’Esprit des Lois”邦訳の嚆矢は何禮之（がのりゆき）による『萬法精理』であるということが定説になっている。『萬法精理』は明治8年11月に版權免許を得て、翌年1月に出版された。卯三郎による頻繁な広告掲載と、両書の出版時期の接近には何らかの事情があったのではないかと推定される。何禮之による翻訳はフランス啓蒙書の英訳者として知られるトマス・ニュージェント（Thomas Nugent）の英訳本“*The Spirit of Laws*”の重訳であることが『萬法精理』の序文にも記されている。『萬法精理』の凡例には「此書

ヲ発行スルニ方リ僚友鈴木氏律例精義ノ訳述亦世ニ出デタリ其現本ハ英仏ノ差アリト雖モ固ヨリ同書タルヲ免レズ故ニ協議ノ上予ハ第二十巻ニ至ル迄鈴木氏ハ第二十一巻ヨリ訳述ニ着手スルニ決セリ是レ一ニハ重複ノ勞ヲ省キニニハ其ノ如キ浩瀚ナル全篇ノ速成ヲ望ムガ為ナリ…」とあり、鈴木唯一と協議の上分担して訳出した旨が記されている。『萬法精理』が全訳の嚆矢であることは間違いないが、フランス語の原著からの訳出は第3篇までとはいえ『律例精義』が最も早いことになる。この点はもう少し膾炙されても良いのではないかと筆者は考える<sup>12</sup>。

そこで卯三郎の『当世言逆論』に戻ってみると、本書で中居先生は政治形態だけではなく、各政体がどのようなときに腐敗するのかを説明している。『律例精義』は第3篇までしか翻訳されなかったが、卯三郎は『法の本質』の第8編の政体の腐敗原理なども十分理解していたのではないかと想定される。

## 5 『当世言逆論』の文体

### A 問答形式と対外認識

前述のように、筆者は『当世言逆論』は中江兆民の『三酔人経綸問答』よりも先に問答体で書かれた政治思想啓蒙書の一つだと述べた。庶民が楽しめるような文体を選んでいるが、恐らく卯三郎は江戸期の戯作に通じていたと思われる。中江兆民も『一年有半』では義太夫や浄瑠璃、俗曲などに親しんでいたことが窺われる。3人の掛け合いによる問答形式の書籍は当時も結構流行していたようである。そしてまた西洋文化と日本文化を対比させた問答形式もよく見られる。そのひとつに成島柳北が『花月新誌』（明治10年6月16日発行）に掲載した「埃及古神像記」を挙げることも出来る。これはエジプトの古神像に絡んで、儒家と僧侶と洋教師が問答形式で儒教・仏教・キリスト教を信仰する人の特性を比較し述べたものである<sup>13</sup>。時代は下るが森嶋外が編集した『めざまし草』の「三人冗語」もこうした鼎談形式に依拠するものである。

また『当世言逆論』も『三酔人経綸問答』も西洋対東洋という対抗軸で書かれている。対外認識を考える際、日本鼻根と西洋かぶれば、江戸戯作に現れる唐に対する「日本」自慢のアナロジーとしても興味深いのではないだろうか。例えば1780年代に「こいつは日本」という表現が流行語として出てくる<sup>14</sup>。大田南畝『寿塩商婚礼（ことぶきしおやのこんれい）』（「此奴和日本」と改題）では主人公が稽古事で長唄や富本、河東

節を習うのだが、それが当時における「今どき」、今様の通人の趣味だった。ここでは唐と和の対比が面白い。江戸の教養人の間では享保以来中国風が流行して「趣のあること」「優れていること」を「から(唐)だ」と称していたが、これに対して「こいつは日本」という表現は、天明の頃から「すばらしい」「まさに日本風だ」と洒落て言うときに使われたようである<sup>15</sup>。

明治初期の対外関係、とりわけ西洋との関係を規定していたものは「万国公法」に代表されるような西洋文明的な価値観であった。西洋列強は強者の価値観で「文明」「非文明」をアジア諸国に当てはめ、植民地主義の正当化をはかっていた。

「文明」の浸透は欧化主義を進展させ、それとともに欧化主義への反発も強まっていった。欧化主義の影響をまともに受けた典型としての琴太と、日本の独自性を強調する社八との議論に中居先生が登場する。中居先生は「文明的」と「日本的」を対立的には論ぜず、結果的に結論を先送りするという手法をとった。

形式と対外認識から考えてみると『三酔人経綸問答』の洋学紳士、豪傑君、南海先生の問答は『当世言逆論』の掛け合いに類似性が見られる。厳密に言えば『三酔人経綸問答』は純粋な問答体とはいえないと考えられる<sup>16</sup>。これに対して、掛け合いを十分生かした『当世言逆論』は問答体の面白さを伝えている。『当世言逆論』の原文の読点は現代から見ると奇妙な位置に付されているような印象を与えるが、掛け合いの「間」を意識しているのではないかと筆者は推測している。兆民のほうは堅苦しい漢語表現を使用しており、卯三郎の作品は町人文化を残す戯作としての色彩が強い。それにはひらがな論者であった卯三郎の庶民の思想が反映されているのではないかと筆者は考える。

## B ひらがな論者

幕末から明治にかけてのウェスタン・インパクトの影響下、明治政府は近代国民国家の成立に必ず国語意識の高まりとともに言語の統一を推進した。また明治初年には、生活語としての方言や、階層による違いなどがあり、全国に通じる言語の必要性が説かれた。しかし、こうした地域差や階級差で異なる話し言葉をひとつに纏めあげていく作業は、そう簡単には行かない。まず話し言葉と書き言葉の溝をどう埋めていくかが課題となり、標準語・文体・文字・仮名遣い・文法等に関して種々の主張がなされた。大正10年ごろからは新聞の社説にも口語文が用いられるようになった。

明治初期の啓蒙思想家たちは漢字廃止論、漢字節減

論、仮名採用論を主張していた。明治初年は主として平仮名採用論が現れ、前島密や清水卯三郎らによって唱えられている。卯三郎には「みくにことば」へのこだわりがあり、かつて『明六雑誌』に「平仮名の説」を投稿していた。

周知のように『明六雑誌』は森有礼が中心となって出版した雑誌で、西周、西村茂樹、阪谷素、清水卯三郎等がそれぞれ日本語の表記法についての論考を掲載した。彼等は江戸末期に書き言葉を習得した知識人たちで、『明六雑誌』で展開された議論の目的は、そのような知識人たちによる大衆の啓蒙にあった。そのためにはどのような文字を使用するのが適切なかが議論の対象となった。西周は「洋字を以て国語を書するの論」『明六雑誌』第1号(4月2日)、西村茂樹は「開化の度に困て改文字を発すべきの論」同第1号(4月2日)、清水卯三郎は「平仮名の説」同第7号(5月17日)、阪谷素は「質疑一則」同第10号(6月28日)でそれぞれ自説を述べている<sup>17</sup>。

卯三郎の説は学問の第一段階、まなびの始めとしての初等教育に関わるものである。高邁な思想を高所から語るのではなく、庶民の日常生活に役立つことばが問題視されている。文字はあくまでも記号であり、日用備忘の道具である。また、やたらに外国のものを使用したがる日本人の習癖を揶揄し愛国心の欠如を批判している。これは輸入商を営む卯三郎が日常的に感じていたことかもしれない。読みやすく解りやすい文章で庶民の知識を向上させることが学者や教師の務めだと述べている。

実はこのような卯三郎のことばに対する認識は万延元(1860)年に遡ることができる。横浜で輸入の商売をしていた頃に『ゑんざりしことば』を、明治7年には『ものわりのはしご』を出版しており、そこに言葉に対する思想が見出されるのである。『当世言逆論』中の漢字に振られたルビは和語が多い。卯三郎は「みくにことば」「やまとことば」をひたすら愛していた。ひらがな表記での庶民の識字率の増加を求めていたが、本書にはその姿勢が汲み取れると思う。そして卯三郎は自身の知識と教養を縦横に織り込み、諧謔を盛り込みながら、読者を話しに引き込んでいく。

## 6 おわりに

以上、清水卯三郎の『当世言逆論』の内容を考察した。李今山は、中江兆民の歴史観を「兆民によれば、一般に社会の発展段階は、専制制度、立憲君主制、民

主共和制の三段階であり、日本では専制制度を脱して立憲民主制を創出すれば大きな進歩であるという。兆民の時代でみれば、この観点は正しい、進んだ観点といえよう<sup>18</sup>と指摘している。卯三郎は兆民とは異なり政治体制を絶対的な固定した体制だとは捉えていない。寧ろそれぞれ社会や時代、そして人間の心情や感情と同様に流転していくものだとして認識していた。

幕末から明治にかけて、富国強兵を旗印に知識人たちは海外から多くの事物を移入した。その中には西洋の政治思想も含まれ、その後の日本の政治体制に影響を与え続けた。歴史を動かす、歴史に名を残した人物の中で、清水卯三郎の名前は郷土史研究家や日仏関係史の中では知られているものの、知名度は限られている。海外からの啓蒙思想を移入した人物として、また庶民を啓蒙する思想家としても果たした役割は少なくない。啓蒙書の堅苦しい表現を戯作に置き換えることによって、当時の政治体制を庶民感覚で伝えた『当世言逆論』は、清水卯三郎のしなやかな政治観を示しているのではないだろうか。

(指導教員 金森 修教授)

(清水卯三郎年譜) (『しみづうさぶろう畧伝』『焔のひと・しみづうさぶらうの生涯』を参考に筆者作成)

文政12 (1829) 年 3月4日誕生。父は誓一、母はさだ。

さだは根岸友山の妹。

天保3 (1832) 年、寺島宗則 (松木弘安) 生まれる。

天保6 (1836) 年、五代友厚 (五代才助) 生まれる。

天保11 (1840) 年、芳川波山に漢学を学ぶ。洪澤栄一生まれる。

嘉永2 (1849) 年6月、甲山村から江戸に向かって出発。オランダ語修得への関心。

嘉永6 (1853) 年6月、ベリー、浦賀に来航。

7月、プチャーチン、長崎に来航。

嘉永7 (1854) 年10月、プチャーチン下田に来る。卯三郎、幕吏筒井政憲の供人となって下田に随行。箕作阮甫に教を請う。11月、大津波下田を襲う。プチャーチンの部下と接近しロシア語を学ぶ。しかしオランダ語習得が本意のため江戸の箕作塾へ入門。

安政4 (1857) 年、海軍伝習生を志願して長崎に下る。

安政5 (1858) 年、長崎から江戸に帰る。薬学の訳書『日本大黃考』出版。

安政6 (1859) 年、横浜の「田辺屋」で大豆を売買する。友人の医師青木しょう (ママ) 庵と横浜の店先

を散歩中、キニーネを置く店でトラブルに遭い町預け。この間立石得十郎 (通詞) に英語を学ぶ。

万延元 (1860) 年、英語会話書『ゑんぎり志ことば』を出版。

3月、桜田門外の変。12月、ヒュースケン襲撃事件。文久2 (1862) 年8月、生麦事件。

文久3 (1863) 年6月～7月、薩英戦争の際、イギリス艦に乗る。この際捕らわれていた松木弘安、五代才助に再会し彼等を救出。

元治元 (1864) 年、薩英戦争と平和の斡旋に働く。結婚。慶応3 (1867) 年1月、パリ万博展のためフランスに向けて出発。日本商人としての渡仏第1号。

明治元 (1868) 年5月、欧米を回って帰国。浅草で瑞穂屋商店を経営。

明治2 (1869) 年、『六合新聞』発行 (3月から4月、7号で廃刊)。フランスから持ち帰った石版印刷機の試し刷りに成功、日本の石版印刷の祖。

明治5 (1872) 年、万国博覧会日本開催について建白。

明治7 (1874) 年1月、農業化学の入門書の訳本『ものわりのはしご』出版。

「明六社」に会計係りとして入社。

5月、『明六雑誌』に「平仮名ノ説」を書く。

明治8 (1875) 年、歯科器材輸入販売を始める。

明治14 (1881) 年、花火に関する英国人スポンの著書の訳本『西洋烟火乃法』、『保齒新論』出版。

明治15 (1882) 年、『当世言逆論 政体篇』出版。

明治16 (1883) 年、『かなのみちびき』『かなのくわい大戦争』出版。

明治18 (1885) 年、『歯科全書』出版。

明治19 (1886) 年～明治31 (1898) 年、『歯科薬物摘要』など歯科関係の書を出版。

明治20 (1887) 年、最初の国語辞典『ことばのはやし』を物集高見編で出版。

明治27 (1894) 年、『日本大辞林』出版。

明治28 (1895) 年第4回内国勸業博覧会に歯科用具を出品して賞をうける。

明治32 (1899) 年6月、『わがよのき上』を書き終わる。

明治43 (1910) 年1月20日死去。享年満81歳。世田谷区北烏山の乗満寺に葬られる<sup>19</sup>。

## 注

- 1 ねぎしゆうざん (1809-1890)。埼玉県大里郡字青山村 (かぶとやまむら) の豪農。私邸に私塾三余堂を開き経学を学ばせた。剣を千葉周作に学び邸内に振武所を開いて武道を教えた。幕末は国事に奔走し勤皇の志士と交わった。
- 2 水戸出身で当時箕作塾の雇い教師であった古賀侗庵が、卯三郎の語学力を評して「グランマチカを一ヶ月の間に読み習いしは、君と佐久間象山のみ。殊に君はセインタキスに及ぼせり」との賛辞を惜しまなかった。(『焔のひと しみづうさぶらうの生涯』50頁。)
- 3 『千葉敬愛経済大学研究論集』第19号 (1982年)、493-511頁。
- 4 またロニー編集による1865年発行の会話書『和法会話対訳』(Guide de la conversation japonaise, Précédé d' une introduction sur la prononciation en usage à Yédo)も卯三郎が協力したものではないかと推定されている。松村明も「羅尼著『和法会話対訳』について」で協力者の存在を示唆している。『近代語研究 第1集』(近代語学会、1965年、所収) 433-467頁。
- 5 『当世言逆論 政体篇』の奥付には著述兼出版人 東京府平民 清水卯三郎 日本橋区本町三丁目二十番地とある。
- 6 同上、12-14頁。
- 7 同上、25-26頁。
- 8 よこやまよしきよ (1826-1879)。幕末・明治初期の国学者・法制史家。和学講談所教授を務め、維新後は新政府に招かれて制度局御用掛箋編輯になった。晩年は東京帝国大学で日本古代法制史を講じた。
- 9 前掲、清水、52-54頁。
- 10 同上、60-61頁。
- 11 同上、75-76頁。
- 12 馬場楨は『律例精義の大意』(総学出版、1987年)で、『律例精義』が『萬法精理』に先だつものだと説明している。筆者も同感であるが、今後の議論が待たれるところである。しかし筆者はまた、同氏によるある論考が澤護の「清水卯三郎——1868年パリ万国博をめぐって——」に酷似していることを確認した。
- 13 井上弘『近代文学成立過程の研究』58-61頁。
- 14 2009年9月9日開催の法政大学国際日本学研究所ワークショップ「江戸時代におけるナショナリズムの表現」で、小林ふみ子氏の報告から知見を得た。
- 15 『角川古語大事典』「日本」項参照。
- 16 『三酔人経綸問答』の問答体については『中江兆民の世界』『三酔人経綸問答』を読む』所収の松永昌三、丸山真男の論考が詳しい。
- 17 詳しくは黒住真編『思想史研究』第7号 (2007年) 所収の拙稿「庶民による庶民のための啓蒙—くさむらのたみ しみづうさぶらうの思想—」を参照されたい。
- 18 「ナカエニスムの示唆」『中江兆民全集』第17巻「月報16」を参照のこと。
- 19 2001年、安岡昭男先生が兼満寺を再訪された時には墓跡がなく、生地の埼玉県羽生市正光寺に移葬されていたとのことである。

謝辞：千葉敬愛大学教授澤護先生、法政大学名誉教授安岡昭男先

生からご教示を頂戴いたしました。また指導教授の金森修先生から拙稿にご指摘を頂きました。お礼申し上げます。

## 参考文献・資料

## 第一次資料

- ・何禮之訳『萬法精理』1876年。
- ・清水卯三郎『丞んぎり志ことば』私家版、1864年。
- ・清水卯三郎『当世言逆論 政体篇』出版人、清水卯三郎、1882年。
- ・清水卯三郎『ものわりのは志ご』出版人、清水卯三郎、1874年。
- ・鈴木唯一『律例精義』碧山書屋蔵版、発行人、瑞徳屋卯三郎、1875年。
- ・鈴木唯一『律例精義大意』碧山書屋蔵版、発行人、瑞徳屋卯三郎、1875年。
- ・Eubres de Montesquieu, ses éloges par d'Alembert et M. Villemain, les notes d'Hélvétius, de Condorcet et de Voltaire, suivies du commentaire sur l'Esprit de Lois, Paris, Dalibon, 1822.
- ・Baron de Montesquieu. *The spirit of Laws*, with D'Alembert's Analysis of the Work; translated from the French by Thomas Nugent, London, G. Bell, 1878.

## 第二次資料

## ① 論文

- ・澤護「清水卯三郎—1868年パリ万国博をめぐって—」『千葉敬愛経済大学研究論集』第19号所収、1981年。
- ・清水連郎「瑞徳屋卯三郎のこと」『新旧時代』明治文化研究会、1925年12月号所収。
- ・白山映子「庶民による庶民のための啓蒙—くさむらのたみ しみづうさぶらうの思想—」『思想史研究』黒住真編、2007年。
- ・高橋勇一「清水卯三郎の長崎行を支えた人びと」片桐一男編『日蘭交流史 その人・物・情報』所収、思文閣出版、2002年。
- ・高橋勇一「箕作秋坪と清水卯三郎」洋学研究誌『一滴』津山洋学資料館編、2002年10月号所収。
- ・高橋勇一「洋学史上の清水卯三郎—『わがよのき 上』補遺—」『教育と研究』第12号所収、1994年。
- ・高橋勇一「ディアナ号の来航と清水卯三郎」『教育と研究』第14号所収、1996年。
- ・高橋勇一「箕作阮甫と清水卯三郎」『教育と研究』第18号所収、1999年。
- ・戸沢行夫『明六社の人びと』築地書館株式会社、1991年。
- ・戸沢行夫「(知)の商人—瑞徳屋・清水卯三郎のこと—」『福沢諭吉年鑑』第23巻所収、社団法人福沢諭吉協会、1996年発行。
- ・松村明「羅尼著『和法会話対訳』について」近代語学会編『近代語研究』第1集所収、武蔵野書院、1965年。
- ・李今山「ナカエニスムの示唆」『中江兆民全集』第17巻「月報16」所収、岩波書店、1986年。

## ② 単行本

- ・井上弘『近代文学成立過程の研究』有朋堂、1995年。
- ・木下順二・江藤文夫編『中江兆民の世界』『三酔人経綸問答』を読む』筑摩書房、1977年。

- ・高橋邦太郎『チョンマゲ大使海を行く〈百年前の万国博〉』人物往来社、1967年。
- ・長井五郎『焔の人 しみづうさぶらうの生涯』さきたま出版会、1984年。
- ・長井五郎『しみづうさぶらう畧伝』私家版、1970年。
- ・中江兆民『一年有半・続一年有半』井田進也校注、岩波書店、1995年。
- ・中江兆民『三酔人経綸問答』桑原武夫・島田虔次訳・校注、岩波書店、1965年。
- ・馬場慎『律例精義の大意』総学出版、1987年。
- ・福澤諭吉『福翁自伝』（岩波文庫版）岩波書店、1954年。
- ・モンテスキュー『法の精神』野田良之・稲本洋之助他訳、岩波書店、1989年。
- ・山室信一・中野目徹校注『明六雑誌（上）』岩波書店、1999年。